

感覚と運動の高次化による臨床的アプローチ そのⅡ

—感覚と運動の高次化理論における教材論を考える—

企画者	渡邊 正人 (千葉県立袖ヶ浦特別支援学校)
司会者	渡邊 正人 (千葉県立袖ヶ浦特別支援学校)
話題提供者	星 茂行 (葛飾区教育委員会) 星 久仁子 (茨城県立つくば特別支援学校)
指定討論者	堀川 聖子 (社会福祉法人愛宕福祉会グループホーム空港西) 船越 知行 (目白大学) 石井みや子 (元 淑徳大学発達臨床研究センター)

KEY WORDS: 感覚と運動の高次化理論 教材論 生涯発達への展望

【企画趣旨】

2016年の日本特殊教育学会第54回大会自主シンポジウム73では、宇佐川浩が障害児臨床の実践から構築した「感覚と運動の高次化理論」を概観した。その後、宇佐川の理論を学んだ卒業生4氏から発達支援の実践についての話題提供と2氏からの指定討論をおこなった。そこで、感覚と運動の高次化による臨床的アプローチが乳幼児期、児童期・青年期における特別支援教育の発達支援だけでなく、重度重複の障害を有する成人への支援、高齢者施設を利用する方への合理的配慮やケアにおいても有効であると確認することができた(1)。

宇佐川は、療育や特別支援教育の療育・指導内容、方法を具体的に検討するにあたり、大きな柱となる視点として教材論を提唱している(2)。教材論を追究するにあたっては、日々の療育活動の中で発達ステージに対応すべく宇佐川をはじめ石井みや子、後藤裕幸、阿部秀樹が中心となって療育教材を開発してきた。

そこで、今回の自主シンポジウムでは、感覚と運動の高次化理論における教材論について焦点を当て、教材開発の原則を再確認する。その上で、感覚と運動の高次化理論によるアプローチの有効性について、宇佐川の元で直接学んだ星茂行、星久仁子、堀川聖子の3氏に特別支援学校や成人期、老年期の実践から教材論を中心に話題提供をしていただく。

指定討論では、宇佐川と同時期に教材論を展開させていた船越知行氏と長年療育に携わった石井みや子氏に、話題提供者の実践からの示唆を整理していただく。更に、発達水準や発達年齢に応じた教材をどのように開発したらよいか、教材を作成していく上での留意点はどのようなことがあるか、開発した教材を発達支援やケアの実践にどのように活かしたらよいかなどについて討論をお願いし、議論を深めていただく。そして、感覚と運動の高次化理論の視点が生涯発達における支援においても有効であることについて触れながら、教材論が乳幼児から高齢者の行動の意図性や認識の理解を把握するうえで重要であることについて、フロアーの方々と共に認識を深め共有していきたい。

【話題提供者の要旨】

話題提供1: 「感覚と運動の高次化理論の視点による手作り教材の活用実例 ～青年期以降の重度重複障害者への取り組みから～」 星 茂行

感覚と運動の高次化理論の視点から教材を活用し、療育に活かしていった青年期の重度重複障害者への取り組みを報告し、青年期における指導に、感覚と運動の高次化理論の視点が有効であることを報告したい。

なお実際に使用している教材を紹介し、教材を通して感覚

と運動の高次化理論の視点に基づき、発達的な段階を見い出していくことで、青年期においても発達的な解釈による行動の意味理解が可能であることを提示していく。

話題提供2: 「感覚と運動の高次化理論の視点による手作り教材の紹介」 星 久仁子

20年以上にわたり作成した手作り教材約120点からいくつかを紹介し、学齢期においても感覚と運動の高次化理論に基づく指導が有効であることを示したい。また教材の作成において重要な「教材の応答性」や「ステップ可変型教材」の考え方を示し、利用者の行動から学ぶことの重要性を提示する。

話題提供3: 「感覚と運動の高次化理論の教材論から学ぶ認知症ケア」 堀川 聖子

認知症高齢者への合理的配慮やケアなどについてエピソードをもとに紹介しながら、感覚と運動の高次化理論の視点に基づいた教材開発や環境調整が有効であることを示したい。

【指定討論者の要旨】

船越知行氏

宇佐川は、1980年以降、「実践から理論へ、理論から実践へ」という発達臨床の中心に教材・教具を置いた。常に、当事者から学び、教材の工夫を通じて臨床場面で問い続け、教材・教具の応答性、構造的、質的および量的ステップという、独自の教材・教具論の原則を生み出した(1998)。

今回は、宇佐川(2008)のいう、「手を使おうとする姿勢の形成」、「おもしろいと感じる教具」、「教具の応答性」を巡って児童期、成人期、老年期における事例から議論を深める。更に教材・教具の持つ環境調整力、関係改善への影響力を検討し、同時に、支援活動で求められる教材・教具の使用時における説明、当事者の生活に埋め込まれた教材・教具、日用品を活かす視点についても検討する。

石井みや子氏

現在、高齢者ケアを受ける立場にあるが、感覚と運動の高次化理論が乳幼児から高齢者にわたる生涯発達の支援やケアにおいても有効な視点になることについて認識を深める。

(文献)

(1) 星茂行他(2017) 日本特殊教育学会第54回大会自主シンポジウム73報告。

(2) 宇佐川浩(1986) 感覚と運動の初期発達と療育～手先の発達指導を中心として～. 社会福祉法人全国心身障害児福祉財団。

(WATANABE Masato, HOSHI Shigeyuki, HOSHI Kuniko, HORIKAWA Minako, FUNAKOSHI Tomoyuki, ISHII Miyako)